

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国英語教育研究団体連合会

(代表者 中村 勝徳 会員数 約60,000人)

T E L 03-3267-8583

1 前 文

今年で4年目となる共通テストでも、昨年と同様に過去のセンター試験で出題された発音やアクセント、語順整序等を単独で問う問題はなく、様々な資料や図表を通して英文を読み、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う内容となっている。外国語に関する様々な知識を実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付ける、という学習指導要領における目標を反映した出題となっている。

昨年と比較し、大問は6問と変化がなく、設問数は39、解答数は49といずれも同様であった。本文と設問及び選択肢を合わせた総語数は約6,200語で昨年から約200語増えており、さらに受験者にとってはかなりの速読力が求められ、新傾向の問題も登場し、最後まで解き終えることができなかつた受験者がいたことが予想される。一律な英文の読み方をするのではなく、素材となる英文の種類や示される図や資料等を理解し、目的に応じて様々な読み方をするのが要求され、設問の趣旨に合った読み方をしなければ時間が不足する。速読と精読のバランスの観点、特に思考力を測定する観点からすると、これ以上語数を増やすことは有効でないと考える。情報量が増え、問題も複雑になり、短い時間の中で単に注意力や情報処理能力を測定するような試験に陥るのではなく、じっくりと考える時間を設定して思考力を十分に測るような試験問題に改善することが求められるのではないかと考える。令和6年度「英語（リーディング）」の本試験の平均点は「51.54点」であり、昨年「53.81点」から「2.27点」下がり、やや難化したという結果になった。さらに一昨年の本試験の平均点「61.80点」から考えると、この3年間でかなり難化したということになる。正答率や得点分布を見る限りでは、大きな偏りなどはないが、難易度は共通テストに挑戦しようとする受験者の動機づけにも影響すると思われるため、慎重な検討をお願いしたいところである。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

令和6年度の共通テスト「英語（リーディング）」は以下のような構成であった。

大問	内容	配点	設問数	解答数
第1問	A 語学学校が主催するイベントのチラシ	10	2	2
	B 遠足での観光ツアーの内容を示す案内文		3	3
第2問	A 戦略ゲームクラブへの勧誘のチラシ	20	5	5
	B 留学生が紹介している海外旅行保険のレビュー		5	5
第3問	A 日本で参加したフォトラリーについてのブログ記事	15	2	2
	B バーチャルツアーを紹介した学校新聞の記事		3	6
第4問	英語クラブ室の改善についての2つの資料	16	5	6
第5問	同じ高等学校を卒業した3人の登場人物による物語文	15	5	9
第6問	A 時間に関する知覚についての記事	24	4	5
	B トウガラシに関して書かれた論説文		5	6

第1問 資料に示された事項についての情報の読み取りとその内容の読み取りに関する設問である。設問数は5問、10点の配点で昨年と同じである。実際のコミュニケーションで出会う様々な形式の情報を読み取り、その情報を基に必要な情報を把握する力が求められる問題である。

A アメリカの語学学校が主催する国際交流イベントについてのチラシに掲載されている情報を読み取る問題。問1は資料前半で、「語学学校の生徒であれば参加費は無料で、受付で学生証を見せればよい」という内容を読み取ることができ、さらに④の“proof that you are a TELS student”が学生証に相当する表現であることが分かれば解答できる。資料から情報を読み取る力と語彙や文法の知識を問う複合的な設問であり良問であった。また、正答率も高かったことから受験者にとっても取り組みやすい問題で、最初の問題はこういったレベルから始まるのが望ましい。問2は示された複数の情報を整理して読むことを求められている。設問に曖昧さがなく取り組みやすい問題であった。資料を十分に把握せずに、イラストのダンサーから解答を類推した受験者は偽肢である②を選択したかもしれない。昨年の問題におけるハサミのイラストが正解を導くための情報であったように、イラストも読み取れる情報の一部である以上、何らかの形で設問と関係性をもつことは望ましいと思われる。

B 遠足で参加できる3つのツアーの案内文を読み、必要な情報を読み取る力が問われている。設問は曖昧さもなく適切であったが、選択肢の内容が比較的細かいため、受験者が正解を得るには、3つのツアーの全体的な内容をある程度詳細に把握し、設問の偽肢の内容を確かめるために本文を改めて確認する必要があったと思われる。解答にやや時間を要したかもしれない。例えば、問1の①の“a church built 250 years ago when the city was constructed”が偽肢であることを確定させるためには、本文資料“The History Tour”の部分の第1文を正確に読む必要があるし、問2についても「すべてのツアーに共通すること」が問われているので、再度確認のために3つのツアーの情報に目を通す必要があったと思われる。昨年の問題よりも資料の細かい部分の把握が求められていた。どの程度の「概要」を把握するかによって読解のアプローチは変化するので、受験者がどのような目的意識を持って英文を読み始めるかについて判断させるコストを過度にかけることは余り好ましくない。毎年ある程度の連続性を持たせて、設問ごとに要求する読解力には安定性をもたせてもらいたい。

第2問 資料に示された事項についての概要や要点の読み取りに関する設問である。設問数は10問、20点の配点で昨年と同じである。「意見」の内容が問われるなど、複数の情報を客観的に判断する思考力・判断力が求められる出題となっている。また、イギリス英語の使用も見られた。

A イギリスの高等学校の「戦略ゲームクラブ」への勧誘をしているチラシの内容を読み取る問題である。資料は1つであるが、「クラブの活動内容」と「クラブメンバーのコメント」がそれぞれ示されており、言わば「事実」と「意見」が上下に示された形となっている。問1では、問題資料文の「いかなるレベルでも参加できる」という内容が、①の“Absolute beginners are welcome.”と合致していることを答えさせる問題であり、“absolute”という語の理解が不可欠である。また、問題資料文の“analyse games using computer software”が②の“Members edit computer programs”とは一致しないことは、それぞれの語の正しい理解が必要であり、語彙力を求めている側面がある。また、問2、問3は比較的に入答率が低かったが、問題資料文の様々な表現と選択肢の「言い換え」にかなり距離感があつたのではないかと考える。作問の方針としては好ましいが、余りにも距離が生じてしまうと、受験者に不要な思考の負担になってしまいかもかもしれない。

B アメリカで海外生活を送る留学生が、海外旅行保険について述べるレビューを読み、概要や要点を把握して、複数の情報を整理する問題であった。3つの保険の内容が示されており、留

学生の経験なども書かれていて情報量も多いが、それぞれの保険の内容がパラグラフで分けられて示されていて、語彙も平易であり、また設問も曖昧さがなく受験者にとっては取り組みやすかったと思われる。問2では、これまでになかった本文で言及されていないものを選ぶ問題が出題されたが、上述のとおり込み入った作業を必要としていないため正答率も低くなかった。本文で言及されていないものを指摘する問題はどうしても負荷が強くなるため、設問や選択肢の内容理解の負荷についてはバランスを取っていただきたい。

第3問 資料に示された事項についての概要や要点を読み取り、本文に示されているイラストや情報を結び付けて読むことが問われている。今年は本文の内容から適切な応答を判断するといった問題があり、新傾向と言える。また、時系列をまとめる問題は今年も出題されている。設問数は5問、15点の配点で昨年と同じである。

A A L Tの姉(妹)が日本でのフォトラリーに参加した経験を自国のイギリスに戻ってから書いたブログを読み、必要な情報を示されたイラストと共に把握することが求められている。昨年は問題文の理解を促す図が示されていたが、今年は“Sakura City Photo Rally Rules”という文字要素で示されており、読解量が増えている。しかし、重要な部分を把握しやすいようにキーワードが太字になっているなどして、受験者が必要な情報を得やすいようになっている。他の資料から情報を得ながら、問題文の理解を深めるような形式は好ましいと思われる。

B バーチャルツアーについて書かれた学校新聞の内容を読み、必要な情報を読み取り、その内容を時系列で把握することなどが求められている。問1の時系列に並べ替える問題は昨年も出題されており、読む目的が明確であり取り組みやすいと言える。ただし昨年と異なる点は、昨年の選択肢は単なる出来事を示す文章であったのに対し、今年はバーチャルツアーの参加者のコメントの文章になっており、読解力がより求められる問題となっている。問3は問題文の正しい理解がないと正しい類推ができない問題であり、より思考力を求める問題となっている。

第4問 複数の記事に示された事項についての概要や要点を読み取り、それらを結び付けて考えることが求められている。設問数は5問、16点の配点で昨年と同じである。ただし形式は大幅変わったと言える。1つ目の記事を踏まえて、そのアンケート結果が示されており、資料としては連続性のある資料となっている。また、それらをまとめるハンドアウトが示され、その内容について解答する形式となっている。「部屋の改装」という必ずしも日常的な話題ではないことに加え、設問に答えるためにはある程度の語彙力が必要であったため、受験者はやや苦労したかもしれない。例えば、問1では24の直前にある“what it is”を正確に理解し、問1の選択肢の中の“appropriate”、“prioritize”、“model”などもイメージではなく確かな理解がないと正解は得られない。また問4に答えるためには、ハンドアウトの“Other Issues to Discuss”冒頭の“majority”が、アンケート結果の最も解答の多かった“sleeping”を選択した生徒を指すこと、“sleep”の言い換えとして“take naps”という表現を理解している必要があった。複数の資料を活用した好ましい形式ではあるが、最終的には語彙や表現の理解を問うことになっている部分がある設問であった。語彙や表現の知識を問うことはもちろん大切であるが、形式の新しさや複雑さとのバランスを今一度考慮されたい。

第5問 まとまりのある文章を読み、必要な情報を整理したり、時系列をまとめたり、文章から読み取れる内容をプレゼンテーションのメモを作成するという形式で考えさせる問題である。設問数は5問、15点の配点で昨年と同じである。同じ高等学校を卒業した3人の、それぞれが経験した出来事について語られ、20年ぶりに再会するという物語文である。英文自体が体温を感じるものであり、今後もこのような英文が扱われることを期待したい。幅広い読解力を育成する、という意味でもこのような文章を読む機会は受験者に是非もってもらいたい。3人の登場人物の現在

や過去が、場面転換を重ねて描かれており、さらに語数も約960語と増えたので、時系列の理解が受験者にとって難しかったかもしれない。その証左に問1の正答率は23.51%であり、かなり低いものであった。問題文の2つ目のまとめりであるKasumiがTakuyaに電話をしている場面に突然切り替わるのは、違和感を覚えるというほどではないが、やや唐突であった感は否めない。さらに問3では、KasumiやTakuyaがMakiから得たものを答えさせているが、正答率が19.12%と2割を切っており、この物語の最も重要な部分である内容がほぼ理解ができていないと言わざるを得ない。問4、問5についても正答率が40%付近であることを考慮すると、かなり難しい設問であったと言える。情報や時系列を整理すること自体の難しさもあるが、上述のように展開の目まぐるしさなど、読解力を問う上で必ずしも必要のない点が難度を上げてしまった部分があると思われる。第4問の部分でも述べたが、問題の形式や設定等の理解に負荷がかかる場合は、設問の難易度とのバランスを考慮していただきたい。

第6問 説明的な文章を読み、それに示された事項についての概要や要点の読み取りを求める設問である。設問数は昨年度と同様に9問、24点の配点であった。問題文だけでも約1,500語に達し、文章の論理展開や流れを把握することを求められており、受験者にとっては相当な速読力と読解力が求められる。

A 「時間の知覚」に関して述べられている記事を読み、それを発表するためにメモを作成するという設定である。問1から問4にかけて、メモの内容に沿って英文の内容理解を問うものである。問2は問題文第5段落の内容理解をすることで正解を導くことができるが、正答率が28.14%であることを考慮すると、この部分の内容理解ができていないか、理解に十分な時間がなかった可能性もある。問3、問4は問題文の内容理解から、“Retrospective timing”と“Prospective timing”の例となるものを答えさせる問題であり、新傾向と言える。知識・技能を活用して、思考・判断をさせる問題で好ましいものであるが、問2のように内容理解の時点でかなり受験者が苦勞をしている状況を鑑みると、必ずしも思考・判断の力を問える問題とは言いきれないかもしれない。

B トウガラシなどの辛いものに関する英文を読み、理科クラブで行うプレゼンテーションを作成するという設定であり、そのプレゼンテーションのスライドの空所に当てはまる内容を答えさせる問題である。正解へとたどり着くための作業量が多く、限られた時間で処理することが難しかったと言える。例えば、問2は正解を導き出すために、文章の広範囲にわたって選択肢の内容を確認しなければならない。また、問3は、問題文第7段落の英文が読めていても、“upset stomach”, “diarrhea”, “numb hands”等の語彙の理解を求めることにとどまってしまっている印象がある。求められる作業量で時間を費やしてしまう受験者が中にいたのではないと思われる。思考力・判断力・表現力等を問う共通テストの問題作成方針を反映していることは理解できるが、受験者の真の力を問うために有意義な読解を求めているかについては慎重な検討をお願いしたい。受験者の日々の学びにおいて、本来的な目標から、英文の情報を効率的に処理するという方向に注力してしまうようなことにならないようお願いしたい。

3 総評・まとめ

本稿では2024年度（令和6年度）共通テスト「英語（リーディング）」（本試験）について検討してきた。大学入試センター発表の問題作成方針にも示されているように、「知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視する」という方針での問題作成には、大変なご苦勞と創意工夫が必要とされると拝察する。様々な資料や図表を通して英文を読み、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う内容となっており、また、外国語に関

する様々な知識を実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付ける、という学習指導要領における目標を反映した出題となっている。受験者が身に付けた力を十分に発揮できる良問も多い。だからこそ、上記で幾つか指摘したように、単に作業量が増えることによる負荷については、慎重な検討をお願いしたい。受験者がその種の問題の対応に過分に注力することは避けたい。さらに、今年は第5問で「物語文」が登場したように、扱われる英文については、その題材や形式については幅広いものとなるように今後も検討をお願いしたい。そうしたことによって、教員の実際の指導や生徒の学びもより豊かなものになっていくと考えられる。

4 今後の共通テストへの要望

現状では、共通テストでは2技能を測定する試験となっている。令和7年度共通テスト試作問題「英語（リーディング）」では、「書く力」を問う側面も見受けられるが、共通テストで3技能がバランス良く問われるということは見通せていない。これは大胆な提案となるが、将来は英語リーディング試験をリーディングとライティングの2つの技能を測定する試験に、英語リスニング試験をリスニングとスピーキングを測定する試験に変更していくことを検討していただきたい。後者のスピーキングテストについては、多くの学校現場でタブレットを利用した試験が毎年実施されており、AI技術を利用すれば短期間で採点することも可能であろう。AIを活用した音声採点システムの開発は進んでおり、複数のシステムを組み合わせることで偏りを排した採点が可能となるのではないだろうか。他の3つの技能の測定については、従来の方法に従い問題の構成を変えるだけで可能になる。外部試験の利用は評価基準が複数になり、異なる試験を同一の入学試験に利用することは公平性を担保する上で大きな問題となるが、共通テストで評価を一本化すれば全ての問題が解決されることは間違いないと判断する。

また、共通テストの得点については、少なくとも国公立大学への出願開始前に受験者に開示していただくことを強く要望したい。受験者は試験中に自らの解答を問題冊子に記録し、試験後は自己採点を行い、そのデータを基に出願の作業に取りかかる。中には解答を転記し損ね、答案を再現する学生もいる。試験時間が足りない上に自分の解答を転記して、決して完全とは言えない自己採点を基に次の個別試験に向けて出願をすることは非常に負担が大きく酷なことだと思われる。得点を開示するまでにとてつもない時間を要することは想像できるが、あらゆることを合理化して何とか実現していただきたい。